



書を捨て町に 出よう



ヒロソフィー

分岐点

写真学科の学生だった頃、一人暮らしで寂しかったのか良く本を読んでいた。ジャンルはなんでも良かった、とにかく長い孤独な時間を潰すためだったから。シャッターを切る回数よりもページをめくる回数のほうが多くなっていたころ、この本に出会った。

書を捨て街に出よう。

数日たったある日、古本屋を呼びほとんど全部売り払った。

空っぽになった入口近くの本棚にはカメラを置くことにした、

いつも相棒を連れ出せるように。